スタジオジブリ作品
STUDIO GHIBLI
やどさがし
BAR

あらすじ

フキは新しい家をさがしに旅に出ます。大きなリュックにいるものはみんなつめて、さあ出発。車だらけの町をぬけると、忘れられた古い小道がありました。小さな石のお地蔵さまがあります。フキはリンゴをお供えして、道を通らせて下さいとあいさつをしてどんどん歩いていきます。さらさら流れている川がありました。古い橋は落っこちています。それに川の中には大きな川の主がいったりきたりしています。さあフキはどうするでしょう。

原作・脚本・監督：宮崎　駿
演出アニメーター：近藤勝也
制作：スタジオジブリ
スタジオジブリ・マンマユート団　提携作品
上映時間：12分11秒

ごあいさつ

わたし達が使う日本語にはもののうごきや様子をあらわす言葉がたくさんあります。

音をあらわす言葉もたくさんあります。

どうもこういう言葉が多いのが日本語の特徴らしいのです。

昔、「風の谷のナウシカ」を作ったときのことです。王蟲の幼虫が動くところで、絵コンテに、ピキピキとかサワサワとかの効果音を書き入れました。効果音の打ち合わせをする段になって、さあ困りました。

ぼくの頭の中では、肢がたくさんある幼虫が動くのですから、シャカシャカとかザワザワとかの足音の中に、ピキッピキッという鳴き声とも固い殻がぶつかるともとれる音が混じっているのです。

効果音を作る人にいろいろ説明するのですが、シャカシャカだってザワザワだって、音というより様子をあらわす言葉ですから、たしかに自分にはそう思えても実際の音にはつながりません。要するに枯れ木をすり合わせる音と、こまかい木や骨や海老の殻のようなものが折れたり砕けたりする音が重なりながら続いて…とか説明しているうちに自分でも判らなくなって。ピキピキと映画に描き込めたらいいのにとか考えたりしました。

もちろん、画面にとつぜん字が現れたら、見る人は混乱していやになっちゃうでしょう。では、はじめから最後まで全部文字を使ったらどうなるんだろう。文字が出たら、日本語が判らない人は困るだろうか。でも、マンガをみた時の経験だと、文字も絵と同じで、画面の印象を決める大きな力があるんだけど…。

子供の頃はみんな（ほとんどみんな）絵を描きながら自分で声を出して、音楽も効果音もセリフも全部やっていたりするのだから、いっそ全部人の声でやったらどうなんだろう。音楽も効果音も全部やっちゃう。急になんだかせいせいする気がしてきます。こうして「やどさがし」は、はじまりました。

「やどさがし」は、画面に文字を入れています。セリフと音楽と効果音は、タモリさんと矢野顕子さんのふたりに全部やってもらえました。

お話を思いついたのは、全然別な時です。音や様子をあらわす言葉をたくさん持っているのが日本語の特徴なら、川や山や森もみんな生きていて、家だって生きていると感じるのは、これも日本人の特徴です。いや特徴だったようです。今では日本人もその感じ方をずい分忘れてしまったようですが、人間の文明の歴史をたどると大昔はどの民族も、空にも雲にも大地や星々にも岩や草や木々にも、霊が宿っていると考えていたようです。

あるとき文字が発明され、お経や聖書やコーラン等の書物が現れ、人の生活の基準を決めるようになってから、あらゆるものに霊が宿っているという考えは消えていったのだといいます。でも日本人は、その原始的な考えや感じ方を永いこと持ち続けて来ている民

宮崎　駿

族らしいのです。自分自身でも、考え方や感じ方を調べてみると、古い血がずい分残っているのに気がつきます。

　森を大事にしたり、川をきれいにしたいのは人間のためだけではなく、それ自体に生命があるものだからという考え方のほうに心をひかれます。幼い子供達にはそういう気持ちが自然にそなわっているのだと思います。

　自分の子供達の話ですが、古くなって水のもるお風呂を壊すとき、ふたりがお風呂がかわいそうだと言い出しました。古いお風呂が、子供達にとってはたましいのような人格のようなものを持っていると感じていたからでしょう。カラッポのお風呂に入って、記念撮影をして、子供達をなだめましたが、何か胸をつかれるような体験でした。

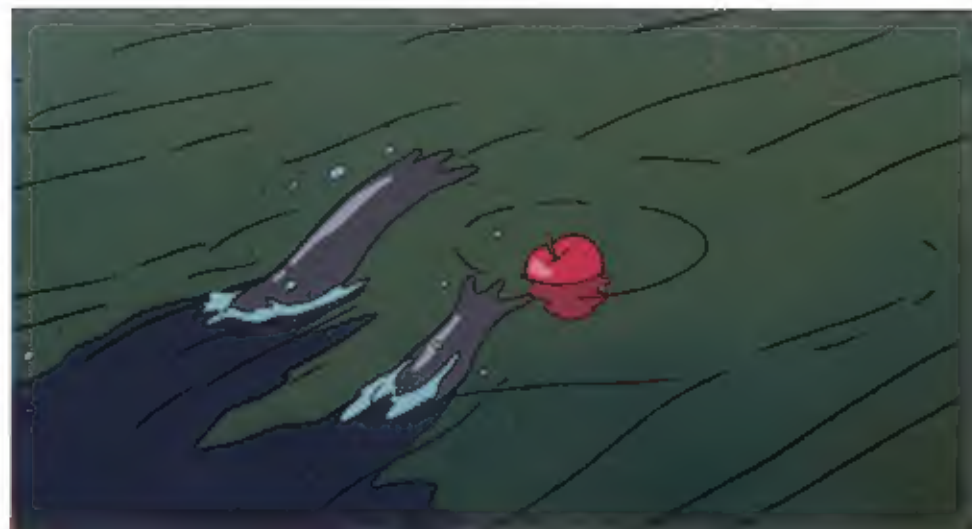
　古い感じ方や考えを元に、ものすごく元気な女の子が新しい家をさがしに旅に出発する映画を作りたいと思いました。

　川も原っぱも古い神社も忘れられてさみしかったのでしょう。その子が来るとみんな姿を現します。女の子はちっともこわがらず、あいさつをしたり、お礼をいったりしながらどんどん行きます。そして、みんながますます元気になるような映画ができたらいいなと思っています。

　川の主（ぬし）や神社の主がどんな声を出すのか判りません。

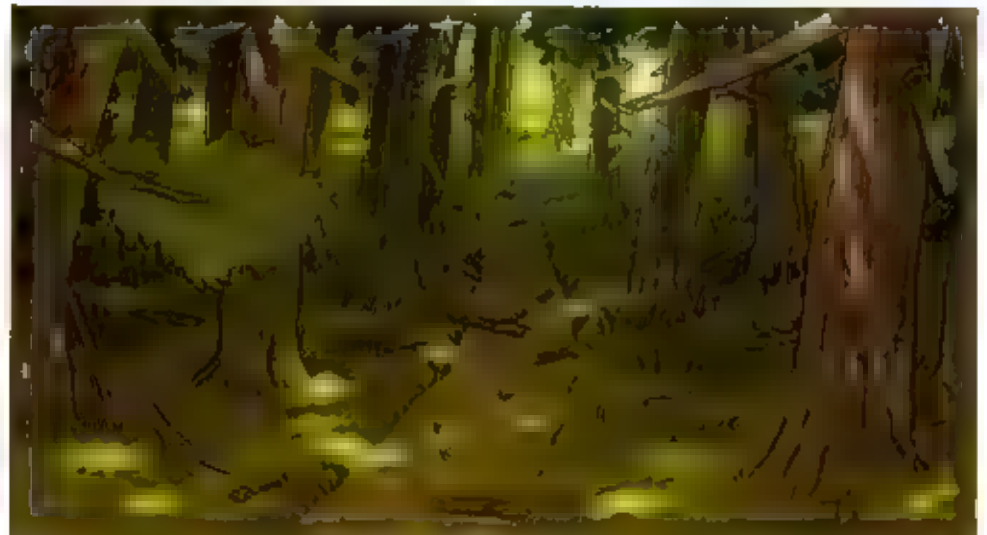
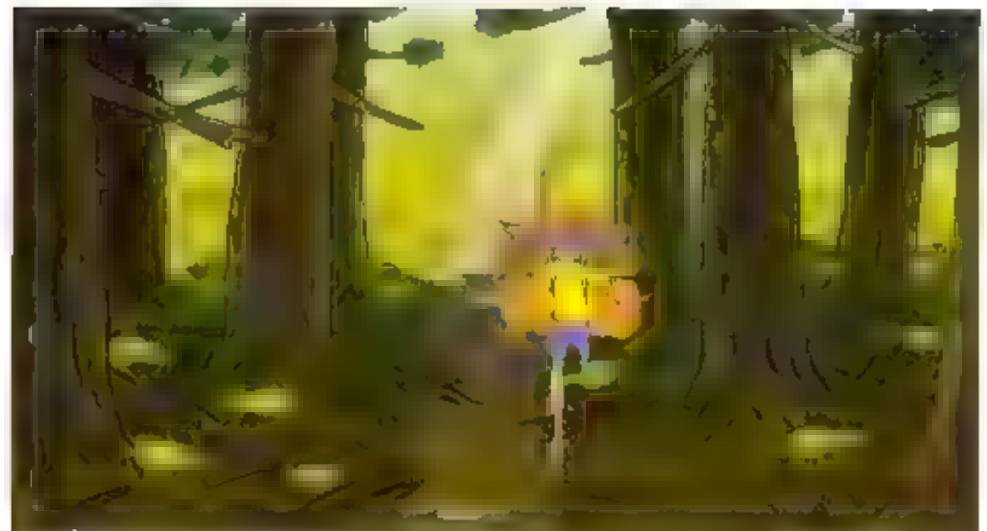
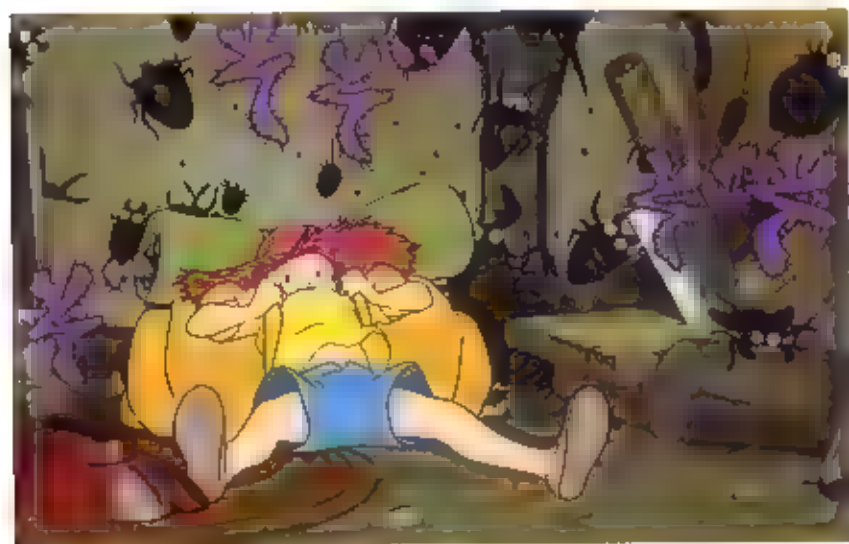
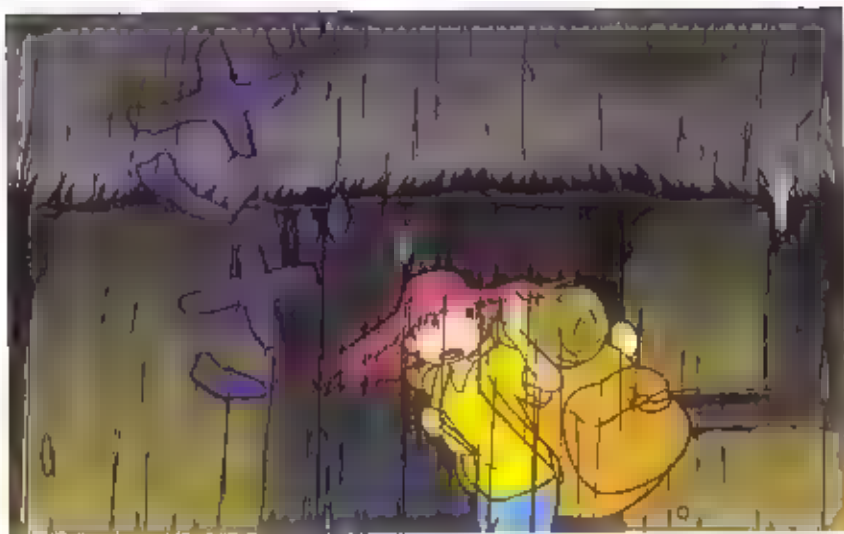
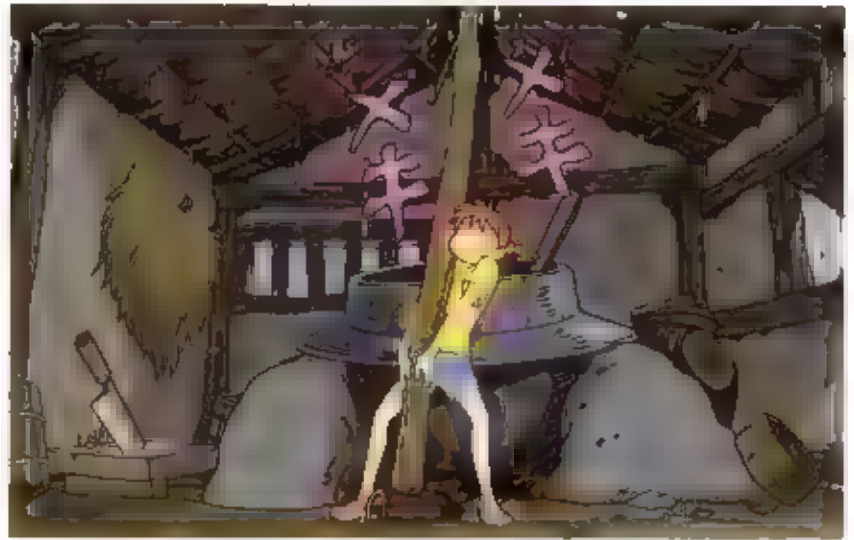
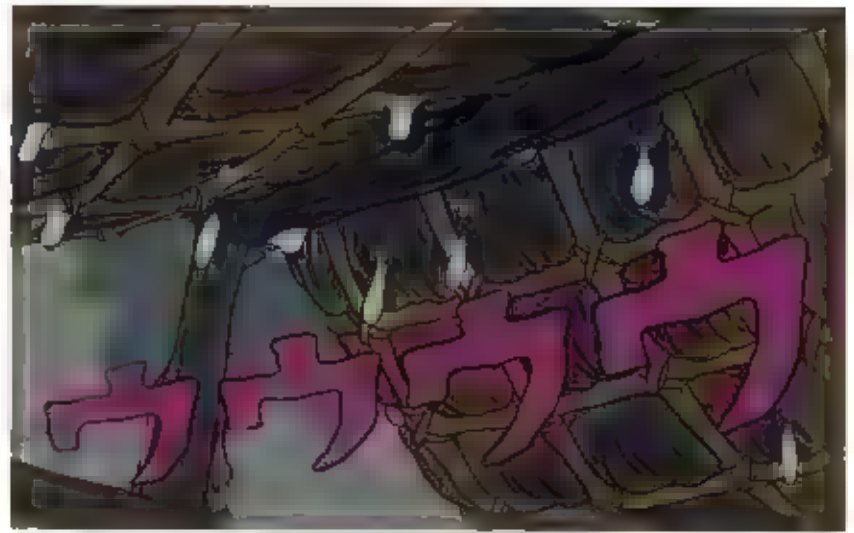
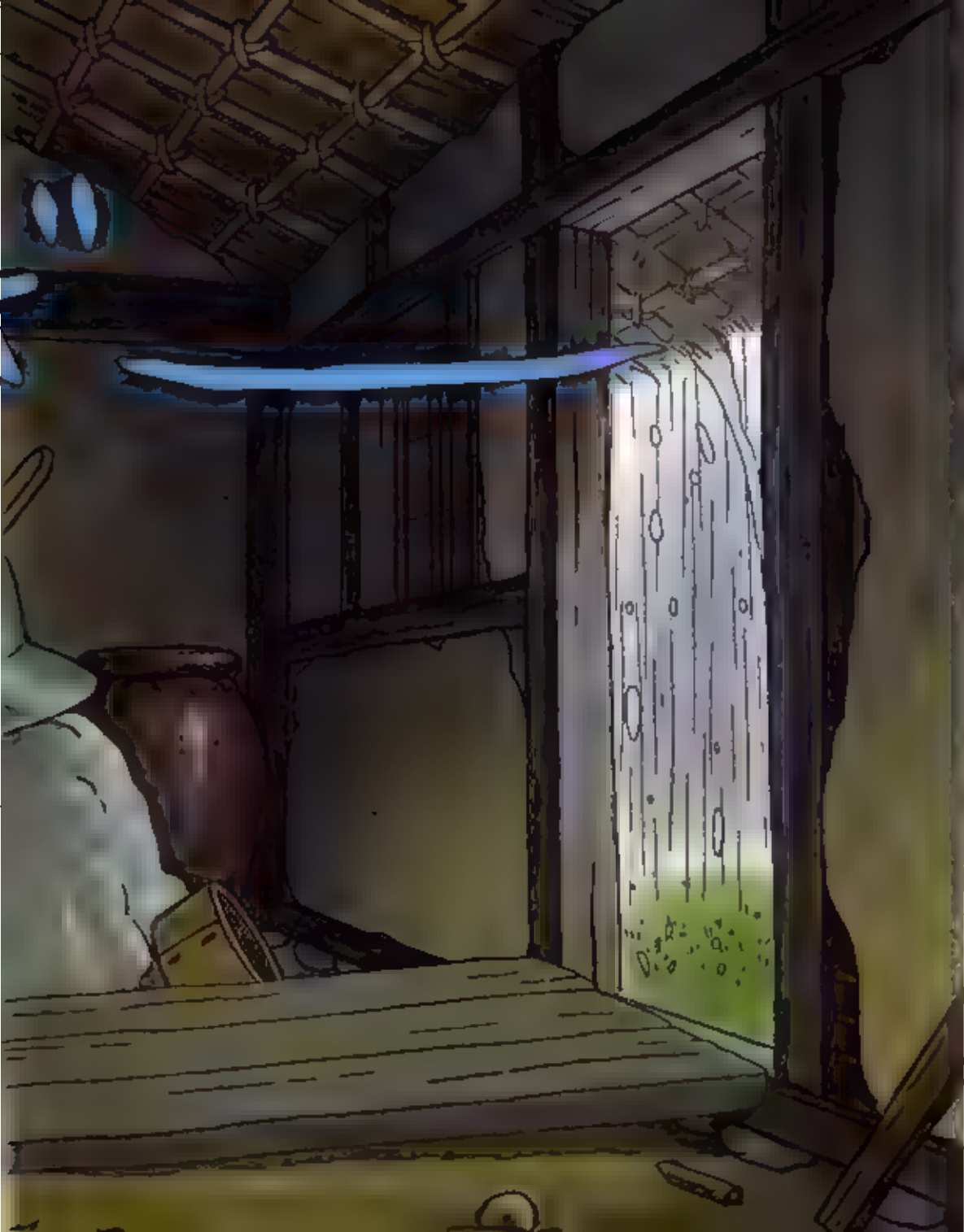
　ヌラーッとかゾワーッとかさわさわとか、そういう感じこそこの映画に必要なものです。みんなに生命があるという考えとタモリさんと矢野顕子さんという才能にめぐりあえて、映画「やどさがし」が出来ました。

　この映画をみなさんが気に入ってくれたらとてもうれしく思います。

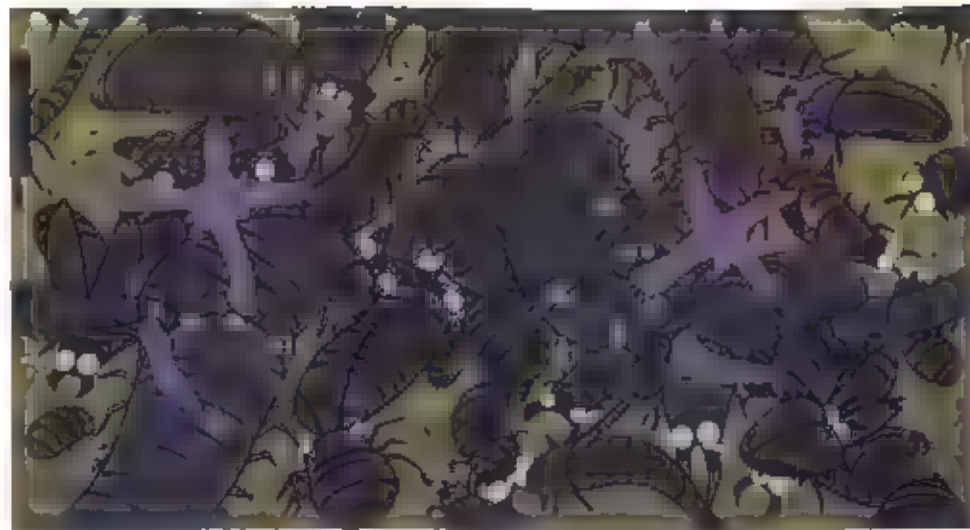
川の主（ヌシ）はぬらりひょうたん

リュックにつめたリンゴを投げた
ぬらりひょうたんはリンゴが大好き

はらっぱをどんどんいくと
ウシオニさまのやしろがあった

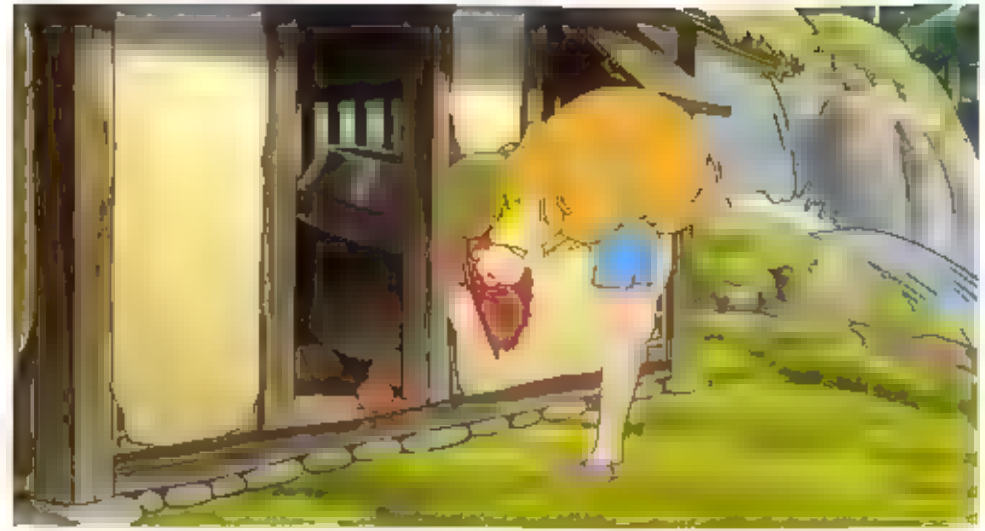
だあれもこなくてウシオニさまはとてもさみしい
リンゴをあげたらよろこんだ

さか道をズンズンのぼったら、くろい山があった

くろい山にもだれかがいる
ヤマンジイかな?
どうか、とおして下さいませ

雨がザアザアふってきた
滝のよこのいっけんやで雨やどり

小屋は古くて、雨もりポタポタ
屋根は重くてつぶれそう
つっかえ棒をしてあげた

さあごはんだ
お湯をわかして
カップでラーメン

そろそろ

ラーメンも半ぶんこ
リンゴも半ぶんこ

そっちは、そっちで
こっちは、こっちで

すごい女の子だ
かわいいなあ・・・

小屋の主がかえってきた　のんのんさまだ
いそいで、お礼をして、出発したら、山のおみやげをたくさんくれた

旅はまだまだつづく
ありがとう
またこいよお

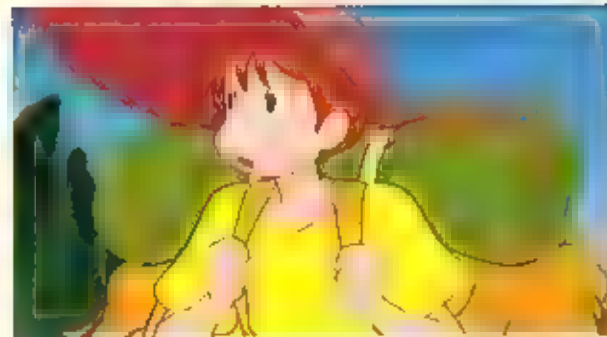
CAST

タモリ

本名 森田一義 1945年 福岡生まれ。[illegible]

映像を見ながら声を出すって面白い！

音楽も効果音も全て人の声でやるという話を聞いて、大胆だけど、面白いと思いました。宮崎監督は細かく緻密な方だと思っていましたけど、全く印象が違う。「こんなに大胆なところがある人なんだな」と、今回、一緒に仕事をさせて頂いて思いました。収録はアドリブで、私が画面に合わせて擬音や擬態語、効果音を発したのですが、目の前に流れる映像を見ると、自然とどんな音を発すればよいか瞬時に浮かび、非常に面白かったですね。宮崎監督から、特に指示や注文はなく、以前から私が好きな矢野顕子さんの声を横で聞きながらの収録は、とても心地よかったです。それにしても映像の力はすごい。何も音が入っていないところがあっても、全く不自然ではないんです。改めてそんなことに気づかされました。皆さんもぜひ一度、映像を見ながら自分で声に出していろんな音を表現してみてください。面白いですよ。

矢野顕子

1955年 東京都生まれ。[illegible] 76年、アルバム「JAPANESE GIRL」でデビュー。[illegible]

フキちゃんは私そのもの

セリフも音楽も効果音も全て人の声で表現するというこの作品の話を聞いた時は「うわっ、やりたいっ!!」と思いました。収録前に宮崎監督が描かれた絵コンテを見せて頂いたんですけど、見ながらもう音を頭の中で鳴らしていました。収録はですね、なんといってもタモリさんが素晴らしい！　時々タモリさんが発する音に聞き惚れてしまいました。一緒に収録できて、本当に良かった。私はいつの間にかフキちゃんに同化して、台本なんかなくたって、全然違和感なくできましたね。フキちゃんはどんな女の子かというと、私そのもの。あんなに虫には強くないけどね（笑）。宮崎監督はおばさんでおじさんで子供で大人。でもかっこいい不思議な人。そんな宮崎さんが作ったこの作品には、映画の原点というか、絵と音が相まって出来る面白さがある。音楽は音を楽しむと書きます。その「音」は私たちの生活の中心にあるもの。その音を大切に聞いてください。

STAFF

住谷　真（録音）

伸び伸びとしたライブ感覚で収録された音の世界

全ての音を人間の声だけで表現するのは初めての経験でもあり、成り立つのかどうか不安がありました。映像には文字でも音が表現されています。宮崎さんからは事前の打ち合わせの席で「文字をそのまま読んだ音ではない方が面白いかも？」と言われ、余計に悩みました。結果的にはタモリさんと矢野顕子さんが画面の文字を気にせず、伸び伸びと演して下さったのが大きな力となり、助かりました。

作業をはじめる前に考えていたのは、収録はひとりずつ行い、編集しやすい状況にしておいて、全ての音を素材として使えるようにすることでした。でも、収録当日、宮崎さんから「収録は二人一緒にできないかな？」とのリクエストがあり、取り敢えずテストで二人同時に演してもらったんです。しかし、そのお二人の掛け合いがメチャクチャ面白くて、宮崎さんはもちろん、僕も大笑いしちゃったんですよ。そうなると、これしかない。このスタイルでやってみようという気持ちになりました。

映画のはしまりと終わりに音楽的なものを入れたいという宮崎さんの希望は、矢野さんによるフキちゃんの鼻唄で叶えられました。そのフキちゃんの、挨拶のようなオマジナイのような言葉が何語だかわからないような音になっているのも「フキは基本的に日本語を話さないようにしたい」という宮崎さんのリクエストからなんです。でも途中からしっかり日本語を喋っちゃっていますよね。でも宮崎さんが「このままでOK！」と言うのでそのまま使っちゃっています。それが勢いとノリのライブの世界の面白さなのかもしれません。

本番の収録は、大きく4つのパートに分けて、それぞれ3テイクずつくらい録音しました。テイクが少ないのは、ほとんど一発OKが多かったからなんです。ただし、このままではまだ未完成です。各パートの中で選ばれたOK部分を繋いでも、それは違和感がある音として聞こえてしまいます。これを、作品として全体の繋がった音にまと

める作業が、僕の仕事です。まず録音したもの全てをひとつひとつ音の種類ごとに分けて整理し、それを部品としました。そして、その部品を組み合わせたり、加工を施してOK部分同士が違和感のないように繋ぎ合わせて行きます。まるでパズルのように組み合わせていくんです。雨もりのしずくの音や虫たちの声は、タモリさんの声を重ねて使ったりしています。矢野さんもフキちゃんだけではなく、所々虫やラーメンを啜る音などにも参加しています。

あと今回、お楽しみとして冒頭の自動車の音には宮崎さんが参加しています。それにしても不思議な作品だと思います。雨のシーンにずっと雨の音が流れてなくてもその印象が残るんですから。人間のイメージ力(想像力)はすごいと思いました。

今回、貴重な経験をさせて頂きました。楽しかったです。(談)

(株)東京テレビセンター 制作技術部部長。ジブリ作品では『紅の豚』『猫の恩返し』『ギブリーズ episode2』などの整音を担当する。

近藤勝也 (演出アニメーター)

アニメーションの基本である動きの面白さを追求した作品

絵も単純で、物語性もない。パントマイムのようなこの作品の演出アニメーターとしての僕の課題は、画面の中で常に何かが動いている、その面白さを追求すること。実はそれがアニメーションの基本で、一番面白くて、難しいところ。いつものジブリ作品の描き方とは違う、もっとしつこく、粘っこく、メリハリをつけて、大げさに動かしていくことを意識しました。例えば人が歩く動きを描く時、これまで3枚の紙を使って表現していたとしたら、6枚使って描くという感じ。動きの感じが出ていることが大切なんです。リンゴを投げる時、腕は伸びない。でも腕が倍くらい伸びていても、リンゴを投げた感じが描けていればその方がいいわけです。そういう風に描いてほしいと原画の人たちにお願いをしました。でも、皆そのつもりで描いていても、なかなか思ったようにはいかないんですね。それを宮崎さんの求める動きにしていくのが、僕の大きな仕事でした。

画面に入っている音を表す文字の扱い方も、僕にとっては課題でした。宮崎さんは文字を物質として捉えていて、キャラクターにまとわりつかせたりもしていましたが、僕は周りの空間、雰囲気を表現するものと思っていました。そうして実際に絵にして動かす時は、フキが動いて、周りの虫たちが動いて、文字が動くというように、少しだけ遅れて動くようにしたんです。そうしないと見ていて面白いものにならないんですよね。このタイミングはものすごく感覚的なところがあるので、アクションレコーダーという原画を仮に動かす装置を使って探るように決めていきました。

今回は僕自身、初心に戻ってアニメーションの面白さに改めて触れた感じです。大変でしたけど、楽しい仕事でした。そういえば宮崎さんも楽しみながら、ウシオニさまの辺りの原画を描いていましたよ。第2弾をやりたいですね。宮崎さん、すぐに絵コンテ描いてくれないかな。(談)

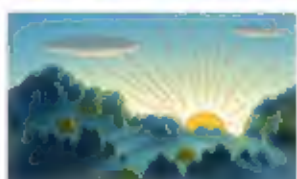
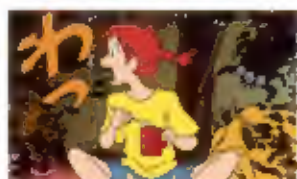
平原さやか (美術監督)

クレヨンを使って、絵本の中の世界のような感じを表現

この作品は動画の動きを優先する作品だと感じましたので、その邪魔をしないように、だけどある程度、美術的な面白さも出したいと思いました。考えた末、紙の目が少し荒いものを使い、背景にアウトラインを入れ、クレヨンで控えめに質感などを加えていく手法を取ることにしました。クレヨンは地面や土壁のザラついた感じを出すのに効果があるんですよ。クレヨンをザザッと入れると、苔が生えているような質感が出せるんです。そうすることで、ベタッとした世界観ではなく、絵本の中の世界のような感じを表現できるのではないかと思いました。

苦労したのは小屋へ行く直前の渓谷のシーンですね。滝があったりして、他のシーンと比べて情報量が多く、自然の雄大さも出さなければと悩んでしまい、なかなか描き上げることが出来なかったんです。それとは逆に、のんのんさまとフキちゃんが小屋の周りで追いかけっこするシーンは、朝の爽やかな光を描くことが出来て、とても気に入っています。

私は、もともとひとり旅が好きなので、フキちゃんには勝手に親近感を抱いています。今回も何かヒントが欲しくてひとりで和歌山県の熊野古道に行ってきました。その結果、山を描く時には、彩度を上げて、パキッとした印象に仕上げています。取材した熊野の山は、空気が澄んでいて、光と影の印象が強烈だったので。あと、今回は私の方で冒頭の川を三途の川と勝手にイメージして、この川を渡った向こうは別世界だということで、川原に曼珠沙華(彼岸花)を咲かせてしまいました。そうすることで、作品全体に楽しいだけじゃない何かを出せるかなあと思ったんです。

今回は3人の美術スタッフと一緒に、アニメーションの幸せな感じを出そうと心がけて作業をしました。この世界を楽しんで頂ければ嬉しいです。(談)

スタジオジブリ・マンマユート団　提携作品

<声とおと>

タモリ
矢野顕子

<スタッフ>

原作・脚本・監督　宮崎　駿
制作　スタジオジブリ
プロデューサー　鈴木敏夫

演出アニメーター　近藤勝也
原画　山森英司　小野田和由　鈴木麻紀子　松尾真理子
田村　篤　米林宏昌　槇田匡史　山田伸一郎
芳尾英明　稲村武志

動画チェック　舘野仁美
動画　手島晶子　中込利恵　大村まゆみ　坂野方子
斎藤昌哉　藤井香織　アレキサンドラ・ウエラウフ
大橋　実　笹川周子　石角安沙美　檜垣　恵
室井康雄　三浦智子

東　誠子　西戸スミエ　槇田喜代子　土岐弥生
椎名律子　大谷久美子　富沢恵子　大友康子

谷平久美子　菅原隆人　金子由紀江　中西雅美
小山正清　福井理恵　中野洋平　塚本　歩
動画協力　アニメトロトロ　中村プロダクション

美術監督　平原さやか
背景　吉田　昇　矢野きくよ　大森　崇

色彩設計　保田道世
デジタルペイント　高柳加奈子　森奈緒美　沼畑富美子　石井裕章
山田和子　古城理恵　高橋広美　朝倉　賢
藤岡翔子

映像演出　奥井　敦
デジタル撮影　薮田順二　高橋わたる　田村　淳

整音　住谷　真
録音助手　高野慎二
録音スタジオ　東京テレビセンター
岩名路彦
音響制作　スタジオジブリ
古城　環　津司紀子
キャスティング　稲城和実
録音協力　大森昭男

編集　木村佳史子　神宮司由美　瀬山武司

制作担当　渡邊宏行
制作デスク　齋藤純也　望月雄一郎
制作進行　伊藤郷平
演出助手　清川良介

現像　IMAGICA
タイミング　平林弘明
フィルム・レコーディング　本間政弘
カラー・マネジメント・システム　松本　渉
ラボ・コーディネート　志村由布子

発行日：2006年1月1日初刷　2010年3月31日第4刷　発行人：中島清文　発行所：財団法人徳間記念アニメーション文化財団　東京都三鷹市下連雀1-1-83　三鷹の森ジブリ美術館
編集：今田千鶴子　デザイン：島 美那子・矢島　洋（夏宝アド株式会社）　編集担当：筒井亮子・三好　寛　編集協力：安西香月
協力：株式会社スタジオジブリ　印刷・製本：図書印刷株式会社　定価 400円（税込）